

2011 年度 庭野平和財団 活動助成報告書

フィリピン・ごみ投棄場周辺コミュニティにおける、 地域住民による保健衛生プログラム運営支援事業

“A support project for management of health program by the people themselves living in a community around a dump site in the Philippines”

特定非営利活動法人 アクセスー共生社会をめざす地球市民の会

京都市伏見区深草西浦町 4-78 村井第一ビル 2 階 7 号

TEL 075-643-7232 / Email: acce@sannet.ne.jp

コード番号: 11-A-229 事業期間: 2011 年 11 月 1 日～2012 年 11 月 1 日



ヘルスワーカー育成講習会の様子（左・真ん中）、住民向け保健衛生セミナーの様子（右）

<活動成果の概要>

- ・ 住民の中から育成したヘルスワーカー11名を対象に、保健衛生講習会を23回実施。
- ・ 講習を受けたヘルスワーカーが交代で多目的保健センターに常駐し、年間2712人の応急処置、健康相談、病院搬送に対応。住民の健康問題に関する不安や心配を軽減させることができた。
- ・ 住民向け保健衛生セミナーを6回実施し、のべ503人が参加。
- ・ こうした取り組みを通じ、住民の保健衛生問題への対応力を向上させると同時に、生活の悩みや地域の問題について「話し合い、原因を明らかにし、解決策を提案し、解決に向けて行動する」という姿勢を養うことができた。
- ・ ヘルスワーカーとなった女性たちは、保健衛生活動を通じて自信をつけ、地域の人々から頼られるリーダー的存在へと成長している。

◆ 活動の背景と目的

事業実施地であるフィリピン・マニラ市トンド地区のごみ投棄場（通称モークーモンテン）周辺には、1,000軒前後の簡素な家々が立ち並び、約6500人が暮らすスラムとなっている（右写真）。住民の多くは、ごみの中から再生可能な物を拾って廃品回収業者に売ることによって生計を立てているが、その収入は1日200円前後と少なく、1日3回の食事もままならない家庭が少なくない。

住民たちは低収入、教育へのアクセスが制限されていることなど、様々な問題を抱えているが、中でも過酷な労働環境と劣悪な住環境から引き起こされる健康問題が最大の問題となっている。労働中に割れたビンや針金などで怪我をしたり、ごみ収集車やブルドーザーによる事故に巻き込まれることも少なくない。衛生状態が悪いにも関わらず清潔な水を十分に得ることも難しいため、下痢や膀胱炎などの感染症が多く見られる。加えて、ごみから出るメタンガスやコミュニティ内で行われている木炭づくりの煙の影響などによって気管支系の病気（喘息・気管支炎）もよく見られる。しかし、行政による保健医療サービスが受けられる施設が数キロはなれたところしかないため、2006年12月に当会が「多目的保健センター」を地区内に建設した（上写真）。

多目的保健センターは住民に対して保健衛生サービスを提供するための拠点であると同時に、地域住民への基礎保健知識の普及をすすめ、住民が自ら健康を維持していける能力を高めるためのエンパワーメント（能力向上）センターとして機能することも目指して運営してきた。過去2年間で、10名以上の地域住民を対象に研修を重ね、ヘルスワーカー（基礎保健知識を持った健康相談員）として育成。2010年以降は1名の有給スタッフと10名前後の有償ボランティア・ヘルスワーカーが、地域住民を対象とした保健衛生サービス（健康相談、応急処置、薬の安価販売、重症（傷）者の緊急搬送、地域内巡回）を、毎日24時間体制で提供している。

庭野平和財団から助成を受けた2011年～2012年は、以下の2点を主要な目的として、事業に取り組んだ。

- 多目的保健センターを拠点に提供する保健衛生サービスの質の向上と量的拡大
- 「地域の健康は地域住民の手で守れるようになる」ことを目指した住民のエンパワーメント



◆ 活動の内容と方法、実施経過

事業1 多目的保健センターの設備・医薬品・サービス内容の向上

月平均 200 名のセンター利用者のニーズに対処できるよう、以下のことを行った。結果、のべ 2712 人がセンターを利用した（一般の傷病手当：2392 人、結核治療 120 人、結核疑いの調査：200 人）。

- ・ 病院に行くほどではない患者に対して、症状に応じた薬（化学薬品・漢方薬・薬草）を、販売（どうしても払えない貧困者の場合は無料で提供）。毎月、平均 8000 円分程度の医薬品を購入し、ヘルスワーカーが多目的保健センターにて保管、販売、配布した。
- ・ 多目的保健センターでの応急処置業務に必要な基礎医療備品（血圧計 1 台、喘息治療用吸入器のマウスピース 20 個、医療用ステンレス洗面器 1 個）を新たに購入し、日々の患者対応で利用した。
- ・ 多目的保健センターを拠点として、ヘルスワーカーが 24 時間体制（交代制）で住民の健康相談にのり、応急処置や薬品の販売、重症（傷）者の病院搬送を行った。経済的な理由により病院に行くことが困難な患者には、交通費・治療費等を一部補助した。対応した患者の症状、それへの対処内容等は全て記録し、定期的に医師や医療従事者にチェックしてもらい、対応力改善のための助言を受けた。
- ・ マニラ・チャイナタウン財団と共同で、医師・看護師団を地域に招いて、「無料診療活動（メディカル・ミッション）」を 6 月と 7 月に実施。アクセスの多目的保健センターを会場とし、受付、体温・脈拍・血圧の測定をヘルスワーカーが担当。6 月に 64 人、7 月に 121 人の患者が医師の診察を受けることができた。
- ・ 公益財団法人 結核予防会がフィリピン政府保健省と連携して行っている結核対策プロジェクトのパートナー団体となり、2011 年 12 月より結核対策キャンペーンをスタート。センターに相談にやってくる患者の中から結核の可能性のある人を見つけ出したり、地域を巡回して結核疑いのある人を見つけ出し、検査機関を紹介する活動を行った。また、ヘルスワーカーのうち数名が特別な結核研修を受講し、通常は医療機関でしか取り扱うことができない結核治療薬を扱えるようになったことで、のべ 120 名の結核治療を多目的保健センターで行うことができた。

【対応患者数一覧】

年月	一般 手当	結核 治療	結核 調査
2011 年 11 月	332	12	
12 月	309	12	
2012 年 1 月	260	15	
2 月	232	14	
3 月	196	15	
4 月	233	17	
5 月	229	14	
6 月	141	8	
7 月	184	5	
8 月	93	3	
9 月	86	3	
10 月	97	2	
年間合計	2392	120	200
総利用者数	2712 人		



購入した医療備品



無料診療活動で受診しにきた患者に、事前説明をする様子



結核予防会とのパートナーシップに関する署名の様式の様子

- 2012年7月22日、ヘルスワーカーの一人、マリルー・ヴァリエさんが多目的保健センター前で銃殺されるという事件が起こった。マリルーさんはヘルスワーカーとして活動する傍ら、地域の住民リーダーとして、ギャングによる脅しやドラッグの密売といった違法行為の撲滅運動に熱心に取り組む女性だった。また、地域の立ち退き問題への反対運動の先頭にも立っており、以前から「立ち退き反対運動を止めなければ殺す」などの脅しをギャングから受けていた。今回の殺害は、立ち退きを進めたい人々の意向によるものだったと考えられる。事件後、7月後半～8月前半にかけては他のヘルスワーカーや地域住民（利用者）も恐怖とショックで多目的保健センターに寄り付かなくなり、当会のスタッフも安全のために地域への出入りを制限したため、一時的に保健衛生プログラムを中断しなければならなかった。しかし8月後半から徐々にヘルスワーカーたちを地域外に呼び出して継続した働きかけを行った結果、残ったヘルスワーカーだけで多目的保健センターの運営を再開することができるようになった。8月以降の保健センター利用者数が100人を下回っているのは、こうした事情による。

事業2 ヘルスワーカーの能力向上のための研修

- 本事業を担当する現地在住スタッフ（以下、現地事業実施者）とヘルスワーカー11名を対象に、保健衛生に関する知識を深め、応急処置の実践力を定着させるための研修を23回、実施した。過去2年で学んできた内容を復習すると同時により深く学び、ヘルスワーカーとしての対応力を高めることを目指し、以下のテーマを取り扱った。

	年月日	参加人数	講師	テーマ
1	2011年11月15日	9	アーロン・マズスト（介護師）	患者のケア、介護における心構え
2	2011年11月19日	9	アーロン・マズスト（介護師）	基本的な応急処置に関する復習①
3	2011年12月9日	9	メリー・ミア（医師）	基本的な応急処置に関する復習②
4	2011年12月15日	9	メリー・ミア（医師）	発熱、高血圧の処置
5	2012年1月14日	9	メリー・ミア（医師）	デング熱の原因、予防法、手当て
6	2012年1月29日	9	メリー・ミア（医師）	結核の原因、予防法、治療法
7	2012年2月11日	7	メリー・ミア（医師）	女性の健康を害する諸要因①
8	2012年2月18日	8	メリー・ミア（医師）	主要な病気の兆候と症状、手当て
9	2012年3月3日	9	メリー・ミア（医師）	女性の健康を害する諸要因②
10	2012年3月29日	6	メリー・ミア（医師）	立ち退き問題と女性の健康
11	2012年4月12日	13	メリー・ミア（医師）	夏季にかかりやすい病気の対処法①
12	2012年4月17日	10	メリー・ミア（医師）	夏季にかかりやすい病気の対処法②
13	2012年5月3日	13	メリー・ミア（医師）	立ち退き問題と、ストレス対処法 強制執行時を想定した怪我の処置
14	2012年5月4日	13	メリー・ミア（医師）	応急処置の復習、東洋医療の基礎 手洗いキャンペーン準備
15	2012年5月26日	6	メリー・ミア（医師）	10種類の薬草の効用と使い方
16	2012年6月13日	8	ロジャー・デイタ（指圧師）	指圧による対処法の実践①
17	2012年6月14日	8	ロジャー・デイタ（指圧師）	指圧による対処法の実践②
18	2012年7月30日	6	メリー・ミア（医師）	抗生物質や化学薬品の良い点、悪い点
19	2012年7月31日	5	メリー・ミア（医師）	大切な人を失った人のためのリカバリー
20	2012年8月10日	6	メリー・ミア（医師）	結核の症状、日本での結核対策
21	2012年8月11日	6	メリー・ミア（医師）	結核差別、患者を見つけるために
22	2012年9月27日	7+夫3	メリー・ミア（医師）	リプロダクティブ・ヘルスと家族計画①

23	2012年9月28日	7+夫3	メリー・ミア（医師）	リプロダクティブ・ヘルスと家族計画②
----	------------	------	------------	--------------------

※ 5月、7月、8月、9月は地域外での一泊研修としたが、1日を1回としてカウントしている。

※ 10月は、地域外の一泊研修で「地域の保健衛生改善のための次年度計画づくり」を予定していたが、事業評価ミーティングと報告書作成を優先したため、時間をとることができず、実施できなかった。

- 上記のほか、結核予防会が実施する研修、ワークショップ、モニタリング評価などにヘルスワーカーを参加させ、結核問題への対応能力強化にも積極的に取り組んだ。中でも、本事業の現地事業実施者であり、スモークーマウンテン地区の住民でもあるジェニファー・モラロスは、「最も活躍したボランティア・ヘルスワーカー」として表彰を受け、知識・実践の両面において高い評価を受けるまでに成長した。（右写真）



事業3 地域の母親たちを対象とした保健講習会の開催と、保健キャンペーンの実施

- 現地事業実施者とヘルスワーカーが企画から実施まで担当し、地域の母親を対象とした保健講習会を5回、実施した。各回50人、のべ250人の参加者を目標としていたが、のべ503人の参加を実現することができた。（開催日、参加人数、テーマの内訳は以下表を参照）
- 現地事業実施者でヘルスワーカーの指導役であるジェニファー・モラロスが保健講習会の講師を担当。ヘルスワーカーは事前準備、当日の進行、講師補助、広報活動などを担当した。
- 結核をテーマに扱った第2回では、イラストを多用したテキスト（添付資料）を作成し、参加者全員に配布して講習を行った。

	年月日	参加人数	テーマ
1	2012年1月14日	35	デング熱の原因、予防法、手当の仕方
2	2012年1月29日	35	結核の原因、予防法、治療方法
3	2012年3月3日	45	女性の健康を害する諸要因と対処
4	2012年3月29日	38	女性の健康と立ち退き問題
5	2012年4月27日	350	夏季にかかりやすい病気の対処法と立ち退き
		503	

- 現地事業実施者とヘルスワーカーの指導のもと、上記の講習に参加した母親たちを組織し、母親主導の保健衛生キャンペーンを2回、企画・運営することを計画していた。しかし、母親主導のキャンペーンを組織するまでには至らず、ヘルスワーカー主体のキャンペーンを1回実施する結果となった。具体的な内容は以下の通り。



あ) ヘルスワーカー7人が、現地事業実施者のサポートのもとでキャンペーンの企画内容を議論。

い) ヘルスワーカーが「病気予防における手洗いの重要性」をテーマに、スローガンを決定。

スローガン例「手を洗えば、病気が防げる!」、「手洗いをする人は、必ず長生きできる!」等

う) ゴミ捨て場から拾ってきた廃材にペンキでスローガンを書き、リサイクルのキャンペーン看板を製作(上写真)。地域の人通りが多い場所(集会場や、多目的保健センターの入り口)に看板を設置。

え) 何らかの用事で多目的保健センターを訪れる人々に必ず手洗いの重要性を説明。

◆ 活動の成果

1. 多目的保健センターの総合的な評価

24時間体制で初期治療に対応する多目的保健センターが地域内にあることは、住民にとって安心につながっている。深刻な病気ではないかと案じ、お金と時間を費やして数キロはなれた病院に行くことは、住民にとって大きな負担である。また、お金や時間を節約するために痛みや辛さを我慢してきた住民も多い。そうした負担や我慢を軽減させる存在として、多目的保健センターは高い評価を受けている。

2. 予防や初期段階で治療できるケースが増え、深刻な症状に苦しむ人が減少



保健衛生セミナーを通じた病気の予防方法の周知や、日々の健康相談を通じて、病気にかかりにくくなったり、初期段階で適切な治療を受けられる人が増えている。例えば、結核治療が可能になり、感染拡大を抑えられるようになった。喘息患者からは「吸入器のおかげで発作の苦しみが軽減された」との声が届いている。また、頻繁に下痢を起こしてセンターによく来ていた子どもについて、手洗いキャンペーン実施以降はセンター利用回数が減ったという事例も確認されている。

(写真：喘息発作をしずめる薬を吸入する子ども)

3. ヘルスワーカーによる多目的保健センターの自立的運営の第一歩

2012年7月以降は元ヘルスワーカーが殺害されるという痛ましい事件があり、一時はプログラムの中断を余儀なくされ、困難の連続であった。しかし、現地事業実施者や中心的ヘルスワーカーが活動から撤退せざるを得ず、その他のスタッフも地域内に入れなくなるといった状況の中で、他のヘルスワーカーの「自分たちがしっかりしなければ」という意識が高まり、結果的にヘルスワーカーによる自立運営の重要な一歩を踏み出すことができた。

以前は、ヘルスワーカーは重要な判断をすることを避け、些細なことでも現地事業実施者に相談する傾向があったが、現地事業実施者が地域内に常駐できなくなった今、ヘルスワーカーが助け合いながら自分たちで判断できる場面が増えている。電話やメールによる相談・助言を行いながら、日々の運営や住民向け保健衛生セミナーの当日の運営はすべてヘルスワーカーに任せられるようになったことは、大きな成果である。

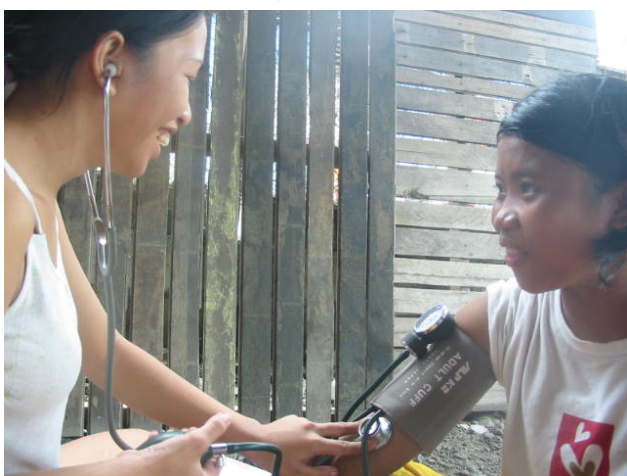
4. 政府保健省や他 NGO との連携

長期的な展望として期待していた、政府保健省や他 NGO、地域の公立ヘルスセンターなどとの連携

は、想定した以上のスピードで進展している。結核予防会が取り組む結核対策プロジェクトのパートナー団体となったことで、以下のような取り組みが進み、地域内で結核治療ができる体制を確立することができたことは大きな成果である。

- 1) 結核予防会による講習をヘルスワーカーが受講（結核の症状、治療方法、薬の管理・使用方法など）
- 2) 結核に関する知識の地域内での普及（保健講習会や、多目的保健センターでの患者対応時）
- 3) 地域内で結核の疑いのある患者を見つけ出し、公立の保健センターへ紹介して検査を受けさせる
- 4) 結核と診断された場合は、保健省から提供される治療薬を多目的保健センターで保管し、ヘルスワーカーの監督のもとで6ヶ月間継続して投薬（完治まで責任を持ってヘルスワーカーが患者をケア）
- 5) 結核に対する偏見や差別をなくすことを目的に、結核患者やその家族に対して結核に関するオリエンテーションを実施

5. 「誰もが安心して暮らせる地域づくり」に積極的に取り組む女性たちの増加



2011年～2012年は、保健衛生プログラムによる健康状態の改善だけでなく、女性のエンパワメント（能力向上）が前進していることを強く実感できた1年だった。

ヘルスワーカーとなった人々（10人の女性、1名の男性）は、活動参加当初は保健衛生についても女性の権利についても、ほとんど専門知識をもたなかった。しかし、研修でさまざまなテーマについて学び、スキルを身につけていくにつれ、価値観が変わり、自信をつけ、人に奉仕する喜びを感じるよう

にまでなっていたのである。

彼女たちは研修での学びをまず家庭内で実践し、家族の健康を維持できるようになることで喜びを感じたと言う。次に、その保健衛生に関する知識を近所の人たちや友人にも共有するようになったことで、近所の人々から頼りにされるようになった。そうした周囲からの評価が変化したことで、ヘルスワーカーたちは自信をつけ、もっと他者のために働こうという想いを強めていった。今やヘルスワーカーたちは周囲から悩みの相談を持ちかけられたり、尊敬される存在となっている。

「病気の原因を学び、原因に対処することで病気を防ぐ」といった訓練を受けることは、物事を科学的・論理的にとらえ、分析し、解決する方法を考えるという癖をつけることにつながっている。そのため、今ではヘルスワーカーたちは、家庭や地域の中で、さまざまな地域の問題を解決する際のリーダー的存在として期待されている。強制立ち退きや、女性・子どもの人権侵害といった地域の問題について対処しようとするときには、問題の原因について考え、どうすれば解決できるかを話し合い、それを言葉で説明する力が身につけてきた。話し合いを通じて解決策を考え出し、解決のために行動する力も伸びてきている。

保健衛生プログラムの活動を通じてヘルスワーカーはそうした能力を身につけると同時に、積極的であること、人の話をしっかり聞く姿勢をもつこと、自己犠牲をいとわない心を持つこと、他者の立場にたって物事を考えること、しっかりとコミュニケーションをとること、といった態度・姿勢の部分でも成長している。

◆ 今後の課題

1. ヘルスワーカーのモチベーションの維持

ヘルスワーカーは研修を通じて保健活動への関心を高め、非常に安い謝礼（1日200円程度）にも関わらず有償ボランティアとして本プログラムで活動してくれている。しかし、本人も生計活動に従事したほうが暮らしは楽になるので、仕事のチャンスがあればそちらを優先しがちである。また、元ヘルスワーカーの殺害事件が多目的保健センター前で起こったこともあり、家族から保健センターでの活動を止められている人もいる。このように、経済面や安全面の課題があってもヘルスワーカーとしての活動を続けようと思えるような動機付けを多面的に考えていく必要がある。

2. 住民を巻き込んだ地域活動ができるヘルスワーカーへ

この事業の研修やキャンペーンを行うことで、ヘルスワーカーたちは保健衛生面の専門知識を身につけるだけでなく、地域の課題の解決にも積極的に取り組む姿勢が生まれてきた。ただ、2012年11月の時点では、「自分たちががんばって活動を進めていく」という段階であり、他者に働きかけて多くの人を巻き込んだ活動（保健衛生キャンペーンなど）を組織するだけの力はまだ十分には身につけることができていない。そのため、母親主導の保健衛生キャンペーンを組織できるようになることは、今後の課題である。

（添付資料）

2012年1月29日開催 母親向け保健講習会で使用したテキスト（結核の原因、予防法、治療方法）